

編集後記

平成29年度の年報をお届けします。本学教員の1年間の活動記録がぎっしりと詰まった一冊となっています。小さな単科大学で、限られた人数の教員が、同じく限られた人数の事務職員のサポートのもとに、さまざまな学内委員会を運営し、地域に根差した継続的な社会貢献や国際社会の人材育成に寄与する無償の啓発活動を地道に推進し、さらには学生とともに海外3か国に出かけて研修を指導し、その上、教員各自がそれぞれの専門分野における研究活動・学会活動を展開しています。例年同様に、教員各位におかれては平成29年度が如何に忙しかったかを振り返る記録となっています。

さて、平成29年度は、本学の最も重要なミッションである教育に関して、どのような創意・工夫がなされ、どんな成果が得られたのでしょうか？昨年度もこの欄に記しましたが、年報にはそのことを詳細に記述する項目が設けられていませんので、この欄を借りてささやかな記録をしたためたいと思います。

平成29年度は本学の近未来の教育カリキュラム上大きな変革が決断された年でありました。我が国の大学においては、各大学の特色ある教育の実現を担保するため、講義科目1単位あたりの時間数を規定の15時間を超えて独自に設定できるよう、一定の範囲内での裁量権が各大学にゆだねられています。しかし、本学ではその裁量権をあえて返上し、規定どおりの最小時間数の中で講義を組み立てる事を選択し、平成30年7月に文科省への申請と疑義に対する補足説明を経て裁可され、平成31年度からの施行が8月の教員全体会議で周知されました。自学自習の支援のため、平成29年度には食堂の一角を仕切ってラーニング・コモンスのスペースとし、演習室を自習室に転換するなどの当面の環境整備も実施されました。

本学では、すでに前回のカリキュラム改定の際に、アクティブラーニングを推進することを目指して、学生の自主性に基づく自学自習の時間を確保するために大幅な講義時間数の削減が行われました。その結果、自学自習をナビゲートする「課題」が各科目から豊富に出される一方で、複数科目の課題提出期限が重なると十分な時間をあてられない、課題の提出期限と他教科の中間試験が重なると試験勉強の時間を十分とれない等の「副作用」が発生し、後者の場合、中間試験の成績不振者の大量発生という深刻な事態を招いています。そもそも、アクティブラーニングを標榜する現行カリキュラムで育った学生の学習到達度・パフォーマンスは旧カリのそれと比較してどうでしょうか？自学自習・アクティブラーニングの前提となる、学生自身の自主性や自ら食欲に学び取っていく主体性は育っているのでしょうか？現行カリキュラムから新カリへ移行するこの時点で、いちど振り返ってPDCAのcheck, actionを実施し、現時点での教員にとっての「課題」を明らかにし、新カリキュラムでの教育に生かすことを考える時ではないのでしょうか？

来年度から施行される新たなカリキュラムでは、自学自習の時間を今までにも増して多く確保するために、講義時間のさらなる削減が行われます。持ち越しとなる前述の課題に加えて、新カリキュラムでは、自学自習の基礎となる講義において、縮小された時間数の範囲内で大学教育に相応しい豊かな内容を如何に効果的に教授するか、という新たな課題が加わります。科目配置に関しても、従来の教育の順序性に従って検討した結果、1年生の前期後半から疾病・障害に関する臨床科目を開始することになりました。果たしてこのような斬新な試みが可能なのか、医学部

医学科においては臨床科目が概ね3年後期から開始されることを考えると、大きなチャレンジとなります。各科目における周到な授業計画に加えて科目間の綿密な連携が重要となります。学習項目の順序性はもとより、科目間連携を密にして、重要項目は繰り返し学習により知識定着をはかり、その基礎がための上に応用力を養うことができる屋根瓦方式の知識体系の構築が必要です。その構築の骨組みとなるような本学独自のポートフォリオの作成が望まれます。

この年報がお手許に届くころ、新カリキュラムに向けてどのような連携が生まれているでしょうか？新カリキュラムへの本学クルー一丸となったアクションが現代社会の要望に応える新しい教育に結実し、我が国の新たな看護基礎教育の展開に結びつくことを切に祈念します。

年報編集委員長 多久和典子